

第3号様式

平成23年度 京都府立大学地域貢献型特別研究 (ACTR) 成果

分類 番号	B	取組 名称	メディアに描かれた京都の様態に関する学際的研究
研究代表者:	文学部 (研究科)	職・氏名:	教授・野口祐子
研究担当者:	京都府立大学 (浅井学、上杉和央、藤本仁文、長谷川雅世) 外部分担者・協力者 (井口和起氏、松田万智子氏、福島幸宏氏 ほか)		
主な連携機関 (所在市町村、機関 (部署) 名)	京都府立総合資料館		
【研究活動の要約】			
<p>本 ACTR は、新資料館に設置が予定されている国際京都学センターでの府立大学と資料館との共同研究に向けた蓄積のひとつとなるものである。本研究では京都の過去から現在に至る様態の変化と不変の側面を考察するために、広い意味でのメディアを取り上げた。</p> <p>(1) 調査対象として、京都中心部に位置する六角堂、洛中と洛外の境界域に位置した東寺口、そして京都の郊外に位置する龍安寺を選んだ。京都の昔と今について語る上で、それぞれが興味深い例となると推測されたからである。</p> <p>(2) 資料館で研究会を開き、上記3つのトポスの変化を地図・絵図・文献にあたって調査するとともに、現地調査・地域住民への聞き取りを行った。</p> <p>(3) 本研究の成果をまとめ、報告書として発行した。</p>			
【研究活動の成果】			
<p>1. 六角堂 (頂法寺) に関しては、まず江戸時代に出版された各種名所案内記や地誌にみえる六角堂の記述を渉猟して、当時の社会に流布していた六角堂のマス・イメージを確認した。次に個人の旅行記に記述された六角堂イメージと比較することで、マス・イメージとの異同をはかると同時に、旅人が六角堂に何を求め、何を見たのかを抽出した。</p> <p>2. 洛中と洛外を分ける境界に位置した羅生門と東寺口の痕跡を現在の京都に求め、文芸作品、地図、絵図、古文書、写真等の各種メディアにおける描き方を調査した。その上で東寺口を景観復原し、その機能と役割を明らかにした。</p> <p>3. 洛外の龍安寺を取り上げ、そのイメージの変遷を考察した。江戸時代の名所案内記では鏡容池に遊ぶ鴛鴦が有名であった龍安寺が、現在のような石庭の寺というイメージを獲得するまでの過程と理由を、映画を含めた各種メディアにあたることによって明らかにした。</p> <p>4. 京都府立総合資料館所蔵の「京都市明細図」について、その形成過程と意義について検討した。</p> <p>5. 外からのまなざしによる京都観について分析するために、明治・大正時代に書かれた英文の京都ガイドブックを広汎に渉猟し、名所の取り上げ方、その現在との違い、海外のガイドブックと日本の英文ガイドブックとの相違等について考察した。</p> <p>以上の研究成果を平成24年3月末に、成果報告書として発行した。</p>			

【研究成果の還元】

「メディアに描かれた京都の様態に関する学際的研究」（府大図書館はじめ、京都府内の公共図書館で閲覧可能、希望者には送付します）

【お問い合わせ先】 文学部（研究科）教授 野口祐子研究室

Tel: 075-703-5239

E-mail: noguchi@kpu.ac.jp

参考（イメージ図、活動写真等）